



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校生の学校適応感に対して教師との関係が有効に働く条件と教師の役割：個別の生徒と教師及び教師との関わりの広さに注目して
Author(s)	渡邊, 仁
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16809号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16809
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99654
Type	doctoral thesis
File Information	WATANABE_Jin_summary.pdf, 全文の要約



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：渡邊 仁

学位論文題名

高校生の学校適応感に対して教師との関係が有効に働く条件と教師の役割
— 個別の生徒と教師及び教師との関わりの広さに注目して —

本研究の目的は、高校生（以下、生徒）の学校適応感に対して教師との関係が有効に働く条件と、その際に教師が果たす役割を明らかにすることである。

第1章では、高校における学校適応の課題を整理した。発達の観点からみると、高校段階は青年期にあたり、生徒は心理的・社会的に多様な問題を抱えやすい時期にある。さらに、高校では適応に困難が生じた場合、中途退学へとつながるリスクが高く、義務教育段階と比べてセーフティネットが脆弱であるという特徴がある。また、高校は学校ごとの特色の差が大きく、ある学校で得られた知見を他校へ一般化することが難しいという研究上の課題も存在する。ただし、先行研究では、友人との関係と学校適応感との関連は強い一方で、教師との関係との関連は弱い、あるいは認められないことが共通して指摘されてきた。これは、青年期において大人との「タテ」の関係の重要度が低下し、友人との「ヨコ」の関係の重要度が高まるという発達の特徴と整合する。しかしながら、ソーシャルサポートの理論的枠組みに基づけば、高校段階においても教師との関係は重要な意味を持つ可能性がある。例えば、友人との関係が希薄な生徒に対して担任教師から十分なソーシャルサポートが提供されれば、学校適応感の低下を防ぐことができる可能性がある。また、担任教師との関係が希薄な生徒に対して担任以外の教師が支援的役割を果たすことも、同様の効果をもつと考えられる。さらに、教師との関わりが限定的な生徒にとっては、担任教師との関係の質が学校適応感に強く影響する可能性がある。すなわち、友人との関係が希薄な生徒、担任教師との関係が希薄な生徒、教師との関わりが限定的な生徒に着目すると、担任教師や担任以外の教師との関係は学校適応感にとって重要な意味を持つと考えられる。

第2章では、先行研究の課題を整理し、本研究の具体的な目的を設定した。第一に、ソーシャルスキルと教師との関係の関連が十分に検討されていない点である。教師との関係の重要性を検討する前提として、両者の関連を明らかにする必要がある。第二に、生徒個々の特徴を考慮せずに集団として扱ってきた点である。ソーシャルサポートの観点からは、友人関係が希薄な生徒にとって教師との関係が補完的役割を果たす可能性がある。第三に、担任教師と担任以外の教師を区別せずに教師を一括りに扱ってきた点である。担任教師との関係が希薄な生徒にとって、担任以外の教師が重要な支援資源となる可能性がある。第四に、教師との関わりの広さという視点が十分に取り入れられてこなかった点である。教師との関わりが限定的な生徒は、担任教師との関係の質に依存する度合いが高く、マッチングが不十分な場合には学校適応感が低下するリスクが高い。一方で、教師との関わりが広い生徒は、自分に合う教師と関係を築く機会が多く、学校適応感の低下を防ぐ可能性がある。以上を踏まえ、本研究は「生徒の学校適応感に対して教師との関係が有効に働く条件と教師の役割を明らかにすること」を全体目的とした。なお、学校適応感とは学校での居

心地感と課題・目的があることによる充実感として評価した。また、教師との関係は、教師との関係の良好さ、教師に対する安心感、教師に対して指導等の教師としての役割を感じる役割遂行評価として評価した。

第Ⅰ部（第3章）では、ソーシャルスキルと教師との関係の関連を検討した。その結果、ソーシャルスキルと教師との関係の関連は友人との関係との関連より弱く、説明率も低かった。これは、ソーシャルスキルが低い生徒であっても教師と良好な関係を形成できる可能性を示唆している。

第Ⅱ部（第4章）では、友人との関係、教師との関係、学校適応感の関連を検討した。なお、友人から十分なソーシャルサポートが提供されない場合、次にソーシャルサポートを求める相手として、生徒が学校生活の多くを過ごすクラスを運営する担任教師が想定される。そのため、第4章では教師との関係のうち、担任教師との関係に注目した。その結果、充実感との関連において、友人との関係と担任教師に対する役割遂行評価との間に有意な交互作用が認められた。つまり、友人との関係が希薄であるほど、担任教師に対する役割遂行評価と充実感との関連が強かった。これは、友人との関係が希薄な生徒が学校に通う目的を持ち、充実して過ごすためには、担任教師に対して指導等の教師としての役割を十分に感じられるかどうかを重要であることを示唆している。加えて、友人との関係が希薄な生徒を抽出した上で、教師との関わりの広さと担任教師との関係、および学校適応感との関連を検討した。その結果、居心地感との関連において、教師との関わりの広さと担任教師に対する安心感・役割遂行評価との間に有意な交互作用が認められた。つまり、教師との関わりが限定的であるほど、担任教師に対する安心感・役割遂行評価と居心地感との関連は強かった。また、充実感との関連においても同様に、教師との関わりが限定的であるほど、担任教師に対する安心感と充実感との関連は強かった。これらの結果は、友人との関係が希薄であり、かつ教師との関わりが限定的な生徒にとって、学校で充実して過ごす上でも、また居心地よく過ごす上でも、担任教師との関係が重要であることを示唆している。同時に、担任教師とのマッチングリスクが相対的に高いことも示唆された。一方で、教師との関わりが広い場合には、担任教師とのマッチングリスクが低減する可能性も示唆された。したがって、友人との関係が希薄な生徒に対して担任教師がソーシャルサポートを提供することで、充実感の低下を防ぐことができる可能性があり、さらに担任教師とのマッチングリスクを低減するためには、教師との関わりの広さが重要であると言える。

第Ⅲ部（第5章・第6章）では、担任教師と担任以外の教師との関係を区別し、学校適応感との関連を検討した。なお、担任以外の教師との関係を捉えるにあたり、第5章において、担任以外の教師個人と良好な関係を形成する場合、あるいは教師全体と良好な関係を形成する場合には、学校適応感の低下が免れる可能性が示唆されたことを踏まえ、担任以外の教師との関係を「担任以外の教師個人との関係」と「教師全体との関係」の両面から捉えた。その結果、居心地感との関連において、担任教師に対する役割遂行評価と担任以外の教師に対する役割遂行評価との間に有意な交互作用が認められた。つまり、担任教師に対する役割遂行評価が低いほど、担任以外の教師に対する役割遂行評価と居心地感との関連は強かった。また、充実感との関連においても、担任教師に対する役割遂行評価と、担任以外の教師に対する役割遂行評価、および教師全体との関係との間に有意な交互作用が認められた。つまり、担任教師に対する役割遂行評価が低いほど、担任以外の教師に対する役割遂行評価、または教師全体との関係と充実感との関連は強かった。これらの結果は、担任教師に対して指導等の教師としての役割を十分に感じられない生徒が、学校で居心地よく、かつ充実して過ごすためには、担任以外の教師に対して教師としての役割を十

分を感じられるかどうか、あるいは教師全体と良好な関係を形成できるかどうかことが重要であることを示唆している。さらに、教師との関わりの広さが担任以外の教師に対する安心感・役割遂行評価および教師全体との関係に及ぼす影響と、それらが学校適応感に及ぼす影響を検討した。その結果、教師との関わりの広さは、担任以外の教師に対する安心感・役割遂行評価および教師全体との関係を促進する方向に影響を及ぼし、それらは学校適応感を促進する方向に影響を及ぼしていた。すなわち、担任以外の教師に対する安心感や役割遂行評価を高め、または教師全体と良好な関係を形成することで学校適応感を高めるためには、教師との関わりの広さが重要であると言える。

第Ⅳ部(第7章・第8章)では、教師との関わりの広さが学校適応感の低下を防ぐかを、生徒と教師の関係性が幅広いハウス制の学校で検証した。具体的には、友人や担任教師との関係が希薄な生徒であっても、担任以外の教師個人や教師全体と良好な関係を形成することで学校適応感の低下を防ぐことができ、さらに生徒と教師の関係性が幅広い学校ではその割合が高いという仮説を立てた。まず、調査を実施したA高校においては、生徒の視点からも教師の視点からも、生徒と教師の関わりが他校と比べて広いことが確認され、生徒と教師の関係性が幅広いことが示された。次に、友人との関係と担任以外の教師に対する安心感・役割遂行評価および教師全体との関係に基づいて群分けを行い、友人との関係が希薄な生徒の中で、担任以外の教師に対する安心感や役割遂行評価・教師全体との関係が高い群と低い群の学校適応感を比較した。その結果、友人との関係が希薄であっても、担任以外の教師に対して安心や教師としての役割を十分に感じている群、または教師全体と良好な関係を形成している群では、居心地感および充実感が改善されていた。また、その割合は他校と比べてA高校の方が高く、仮説は支持された。一方で、担任教師に対する安心感や役割遂行評価が低い生徒に関しては、A高校の一部を除き、担任以外の教師に対して安心感や役割遂行評価が高くても、その割合が他校より高いとはいえず、仮説は支持されなかった。これは、生徒と教師の関係性が幅広い学校であっても、担任教師が担う役割の大きさにより、担任教師との関係の重要度が依然として高いことが影響していると考えられる。

第9章では総合考察を行った。従来、高校における学校適応研究では、教師との関係の重要度は相対的に低いとされてきた。しかし本研究は、生徒を個別に捉え、教師との関わりの広さという文脈的要因を考慮することで、教師との関係が特定の条件下で重要な役割を果たすことを明らかにした。具体的には、教師全体との関係は「弱い紐帯の強み」として充実感を支え、担任教師や担任以外の教師個人との関係は「ストレス緩衝」や「安全な避難場所」として居心地感や充実感を支える役割を担うことが示唆された。また、担任教師とのマッチングリスクを担任以外の教師が低める可能性も示された。以上のことから、本研究の意義は、教師との関係を担任教師に限定せず、担任以外の教師個人や教師全体へと拡張した点にある。また、特定の学校の特性ではなく、「関係が希薄な生徒」に注目することで、どの学校でも生じ得る現象を実証的に示した点にも意義がある。さらに、教師と生徒の関係を個人の認知次元だけでなく、関係を支える環境・文脈の視点から捉え直した点にも、本研究の独自性がある。